

作物名：うめ

病害虫名：黒星病（病原：*Cladosporium carpophilum*）



写真1 果実の病徴

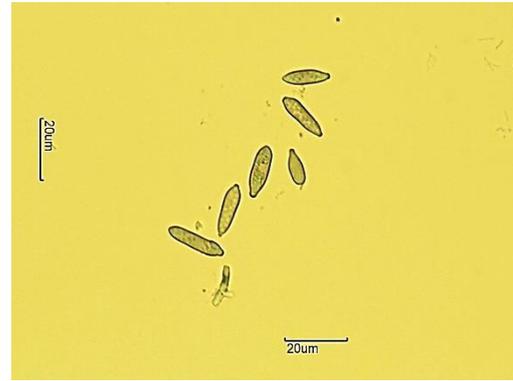


写真2 黒星病菌の分生子

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主に果実と枝に発生する。激発したときは葉柄や葉脈にも病斑が目立つ。
- 果実の病斑は一般に緑黒色、ときに淡褐色円形、径1～3mm程度で、病斑の表面には緑黒色すす状のかびを生ずる。果梗周囲の陽光面から発生し、多発すると病斑がゆ合し、果皮が裂ける。かいよう病の病斑にも似ているが、本病は病変部が果肉まで及ばないので区別できる。
- 枝では当年性の若い枝に発生するので、緑枝の病斑の多少をみれば本病菌の汚染状況がわかる。枝病斑は、はじめ黄緑色、のちに黄褐色に変わる円形ないし不整形のややくぼんだ病斑を生じ、病斑が多いときはゆ合する。秋から冬に病斑は中央部付近から灰褐色ないし銀灰色に変わる。
- 果実、枝での菌の潜伏期間は長く、品種ごとの抵抗性、罹病性が明瞭である。本病は核果類に広く発生するが、病原菌にはレースが存在するといわれている。
- 葉での発生はごく少なく、問題とならない。

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌はうめや他の核果類の枝上に形成された病斑の組織内部で、菌糸のまま越冬し、翌春の伝染源となる。
- 果実への伝染は、春先、枝の越冬病斑の表面が白っぽくなり、中心部付近に生じる小黑点にみえる担子梗および分生子が雨水によって伝搬し、幼果への感染が起こる。また、他の罹病樹から飛散した分生子によっても感染する。
- 枝への伝染は、前年の罹病枝や果実に形成された分生子によって、新梢への感染が起こる。本菌の病原力は弱く、潜伏期間は果実では42～77日、枝では25～45日という報告がある。果実に形成された分生子は、新梢に対する伝染源として重要である。

3 発病しやすい条件

- 本菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属し、菌の発育適温は20～27℃である。
- 果実に発病が認められるのは5月上中旬以降である。春先の気温が例年より高い年、落花後から5月にかけて雨の多い年に発病が多い。また、若木よりも老木で発生が多い。

4 防除方法

- 本病菌の潜伏期間が長期間におよぶことを考慮し、防除時期が遅れないようにする。生育期の薬剤防除は発芽期から開始し、5月にかけて約2週間間隔で行い、樹冠上部にも十分量散布する。
- 枝病斑の多い樹の果実には多発しやすいので、枝病斑はせん除する。若木よりも老木で発病が多いので古枝を整理し、結果枝の更新を図る。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除偏第7巻（農文協）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）